

---

# 孤独な男の幻想入り

牙練

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な男の幻想入り

### 【NZコード】

N8248Y

### 【作者名】

牙練

### 【あらすじ】

家族を失い、幻想郷と言う架空の世界に繰りつく青年。彼はあらゆる物・事を増減する程度の能力を使い幻想入りした。彼は優しい。しかし、彼は現実とも折り合いを付けながら幻想郷を生きていく

## よく解る解説・主人公編（前書き）

今いづちに書いておかないと後々面倒なんで。

## よく解る解説・主人公編

|    |                       |
|----|-----------------------|
| 年  | 直人                    |
| 身長 | 男子高校生並み               |
| 容姿 | 普通・黒髪・黒い瞳             |
| 性格 | お人よし・優しい・意外に熱い・面倒くさがり |
| 能力 | あらゆる物・事を増減する程度の能力     |

詳細：能力を使い脅迫染みた行動をしようとした時、スキマに落ちた。

紫と初対面時に愚者と呼ばれる。

その後和解。

普段は無表情な顔をしている。

クールかと言うとただ単に不器用なだけである。

ここぞと言つ時、感情が溢れ出す。

様は感情的。

一夫多妻を願望にしているが、叶わない夢と諦めている。

尚、鈍感では無いが自分に向けられている好意は自分に向けられている物では無い・一時の気の迷いと決め付ける。

年上には敬語を使うが、砕けた相手に使う気は無い。

無神経に人の気に障る事を聞いてしまつ。

家事は基本的に出来るが、料理・洗濯はまだまだ。

能力説明：あらゆる物と事象を増減する。

物は増やしたり減らしたり出来る。

人物を増やす・減らす事は出来なくも無いが、寿命を使うので多用（と言うか使わない）しない。

持病・感情・寿命・能力・身体能力・免疫などなどを増やしたり減

らしたり出来る。

正し、減らす場合は必ず“1”残る。

増やす場合上限が無ければ何処までも増やせる。

特殊な行動をした際は問答無用で全能力が増える。

彼はまだ純情です。

弾幕：基本的には丸いが、集中すればどんな形の弾幕になる。

威力を増やしたり減らしたり出来る。

場合により一瞬で消滅してしまう程の弾幕も撃てる。

様はスペルカードルールを無視した威力もと言つ事。

妖怪の賢者の論：彼は不安定な精神をしている。あの吸血鬼の妹よりかは強いけど、我を忘れてしまったら非常に不味い存在になるわね……。

幻想入りする際も、脅迫染みた行動を取つたし。

余程追い込まれる事さえ起きなければ良いけど……。

よく解る解説・主人公編（後書き）

と言ひ設定です。

## 優しい青年の暴挙（前書き）

何も完結していない馬鹿の、何時もながらの暴走です。

## 優しい青年の暴挙

（現代の何処か）

青年は1人、生きてきた。  
生まれた頃からでは無い。

ただ、姉夫婦は事故で死に両親は流行病で無くなつた。  
親戚は引き取ると言つてくれたが、青年は断つた。

それから青年は高校を卒業した後、働いて働いて生きてきた。  
そんな生活が2年続いた。

語弊がある。

働いて働いて“能力を使って”生きてきたが正しい。  
彼がこの能力　　あらゆる物・事を増減する程度の能力　　を  
手に入れた出来事は、家族の死であった。

現実に絶望し、自ら命を絶とうと考えてた矢先の時だつた。  
彼は体力を増やし肉体労働をこなし、ダイエットの臨時講習の仕事を請けた際受講者の体重を減らしたり、金を増やしたり地雷を減らしたりして能力を使つていた。

彼は決して、自分の欲望を満たすために人に迷惑を掛ける事はしなかつた。

だが、それでも彼は“孤独”だつた。

彼は孤独を嫌つていた、それなのに彼は優しすぎた存在だつた。  
自分では無く他人の悩み・悲しみ・憎しみを何とかしてあげたいと  
考える、そんな青年だつた。

表情・表面には出さないが、彼はそんな人間だつた。

だからこそ、彼は“都市伝説”に縋りたかつたのかもしれない。

PCで見たことのあるキーワード“東方Project”全部を見た訳では無いが、隔離された世界“幻想郷”と言つ世界があると言う事。

其処には少ない人間と“妖怪・神・妖精・亡靈・鬼”が住む世界と言つ。

彼はそんな世界に行つて見たいと思つた。

しかし、其処に行くには“忘れ去られる”と言う方法か“隙間妖怪”と言う存在に連れて行つて貰う以外に方法は無かつた。

彼が其処に行きたいと強く願つたのは、家族の死だつた。

もし家族が生きていたらこんな考えは若氣の至りとなつていた筈だ。けれど、肉親が居なくなり孤独感に襲われた彼に縋るしか無かつたのが幻想郷だつた。

だからこそ、彼は親戚の引き取りを断り存在を忘れ去られようとした。

けど、結局上手く行かなくて

彼は幻想郷に行けなかつた。

いつか行ける事を夢見て、生きてきた。

最早それは、妄想と言うべきか。

それでも彼は幻想郷に行く事を求めて止まない。

しかし、最早彼も手段を選ばずにはいられなかつた。

「本当はこんな手段を使いたく無かつたが……。」

前記にも記した通り、彼は私利私欲の為に人に迷惑を掛けたくないと考えるお人よしだつた。

しかし、彼は限界だつた。

だからこんな“暴挙”に出た。

幻想郷の存在を“増やし”、俺の存在を“減らす”！

彼がそう念じようとした時。

くはあ！

足元に“スキマ”が開いた。

青年は居なくなった。  
幻想入りを果たした。  
ただそれだけ。

## **優しい青年の暴挙（後書き）**

今回も頭の中で血口完結しない。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド　何これえ？（前書き）

落ちちる～落ちる～　俺達～

名前は今回で解る筈。

## スキマ・イン・ゲンソーキョウラン 下されえ？

「スキマ内」

彼は落ちている。

何処までも何処までも落ちていく。

不意に浮遊感に包まれた。

「……」「……？」

そう駄いた時、背後から声がした。

「ここはスキマの中よ。」

彼が振り返る。

其處に居たのは、金髪で帽子を被り、傘を持つている女性（少女？）が佇んでいた。

「まったく、幻想郷の存在を増やそうなんて、何を考えているのかしら？ねえ、『愚者』さん？」「……何で愚者？」

彼は疑問を口にし、女性は笑み  
　仮面の　　を浮かべつつ告  
　げる。

「それはそうよ。だつて貴方　　」

驚くほど冷たい声。

幻想郷を“消滅”させようとしたのよ？

顔は笑顔ながらさうに恐怖を煽る。

そんな状況の中、彼が取った行動。

それは

「え？」

彼は地面に頭を付け、ひれ伏した。  
土下座である。

「すまなかつた。」

心底詫びる声で謝る青年。

毒氣を抜かれた女性は、 唾然としたが直ぐに平常になり質問をした。

「謝る位ならしなければ良いと思うのに……。」「

「まったく持つてその通りだ、返す言葉も無い。」

女性は思った。

この男、 あんな大それた事をしようじながら此処まで謝る  
と言ひ事は

「貴方は幻想郷に来たかったのかしら?」「

ビクリツ！と彼が身体を震わせる。

その様子は、 母親に叱られる前の子供に見えた。

女性はため息を付きながら、 理解した。

(様は幻想入りしたくて、 でも出来なくて仕方なくって所かしらね。

女性はこの青年をどうするか決めかねていた。

)

幻想郷を消す力を持つ存在を受け入れる、それはかなり危険な賭けね

けれど、女性の答えは決まっていた。

「良いわ、許してあげる。」

「…………え？」

「正し、条件を付けるわ。」

「条件？」

其処まで言つて女性はもつたいぶる様な  
供の様な 素振りを見せる。  
悪戯を思いついた子

「…………条件は？」

「条件は」

幻想郷の起爆剤、もしくは投じられた一石になる事

それが女性の条件だつた。

注意事項も付いてくる。

「正し、外の技術を広めない事。里の人間が外の世界に興味を持ち  
始めたら幻想郷は消滅する。」

「何故？」

「簡単な話よ。幻想郷は元々行き場を失つた妖怪達の最後の楽園な  
のよ。外の技術が発展すると共に妖怪は存在しない生き物となつた。  
いえ、『最初から居なかつた』とされてしまつたが正しいかしら。」

「…………現代社会が妖怪を追放したって訳か……。」

「幻想郷に人間が居る理由も知りたいかしら?」

試す様な目で女性は問う。

青年はそのままさず答える。

「是非。」

「よろしい。本来妖怪は“人の恐怖”から生まれた存在であり、人が恐怖しなければ妖怪は存在しない事になる。だから妖怪は人を襲い、人は妖怪を恐怖した。」

「幻想郷は“人間を飼い殺す”世界って事か？」

「……間違いでは無いわね。幻想郷は人と妖怪が共存してる世界とは言つけれど、実際は妖怪が人間を見下している様な物ね。もつとも最近はその認識を改めてはいるけれど、全員がそう思つてはいる訳では無いのよ。」

「だからあんたは俺に起爆剤になれって言つたのか。そういうった角質を無くし、平等で対等な世界を作らせる為の。」

「まあ、幻想郷内で悩み・苦しんでいる人や妖怪を助けても問題ないわ。」

青年はふと思つ事がある。

「なあ、俺は“危険”じゃないか？」

「……。」

作り笑いを浮かべ、黙する。

「正直に言つてくれないか？」

真剣な眼差し。

女性は表情を何とも言え無い顔にする。

「正直言つて、貴方は危険よ。危険所じゃない、下手すれば“爆弾

”を抱える様な物よ。」「

「なら、何で…。」

「……それはね、幻想郷が“全てを受け入れる”からよ。」

もつとも、最初から危険な奴は入る前、入った後滅するけどね

そう言って、どぎきりの笑顔を見せる。

「……それには、似てるのよ貴方は。」

「似てる?」

「ええ、私の知り合いにね。」

後は、貴方が寂しそうな目をしていたからかしら

青年は目を見開く。

「何……で……!？」

「……解るわよ、長く生きてますもの。」

「……そうかい。」

「何があつたか、何に絶望したかは聞かないでおくわ。」

「すまん……。」

その後、幻想郷について色々聞いたり、スペルカードルールなどを教えてもらつた青年。

「ふう、久々に説明するから疲れちゃつた。」

「あ～、何かすまん。」

「良いわよ別に。しかし、貴方つて謝つてばかりね。」

「……負い目があるからな。」

「それもそうね。」

「所でさ。」

「何かしら？」

「お互いに自己紹介して無いよな？」

「」

2人して爆笑する。

それから互いに自己紹介をする。

「俺の名は直人。名字は捨てた。」

「私は八雲 紫と申します。」

「ノリよ

4

そうして、そろそろ幻想入りするかと思いきや紫が質問してきた。

「貴方は夢とかあるのかしら？」

「…………下らない願望なり?。」

お置かせください

甚矣し也 驚目「」

少し躊躇した後、蚊の鳴く様な声で“願望”を言った。

「……一夫多妻。」

「…………。」

紫は沈黙していた。

「な／＼／＼／＼！わ、悪いかよ！？」

「…………うふふ」

「何だよその笑い！？笑いたければ笑えば良いだろう…」「いえね。別に深い意味は無いわよ？」

「嘘だ！」

「まあ、そこら辺は男の子つて事で」

「俺は20だ！」

「あら以外！背が小さいから18歳かと。」「うがあああ！」

直人は身悶えている！

「まあまあ、幻想郷には美人・美少女がいっぱい居るわよ？勿論私も美少女だけど」

「…………美少女？」

その瞬間、空気が死んだ。

地の底から聞こえてくる様な声で、紫が聞いてくる。

「何か文句でもあるのかしら？」

「イイエメツソウモナイ。」

とりあえず、いよいよ幻想入りする事となつた直人。

「じゃあ、博麗神社に落とすわよ？」

「結界の管理する場所だつて？」

「やつよ。…………今はまだ期待できないけど、

期待してゐるつて言わ

せなれ。」

「女たらしでも良いのなら。」

「ふふ。それじゃあお決まりの台詞を一つ。」

幻想郷へようこそ

く  
ぱ  
あ  
！

直人の足元にスキマが開いた。

「落ちて行くのかああああああああああああああー!?

「当たり前よ。私の素を見た代償よ」

こうして、直人は幻想入りした。

## スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（後書き）

紫の口調がこれで合っているか心配な件。

今回の設定は元ネタがある。

ニコニコ動画『東方星母録』の出来事が元ネタ。

知りたければ見れば良いと思うが、超憂鬱展開があるから半端な気持ちで見ない事。

**博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（前書き）**

博麗神社に落ちた直人。  
空中から地上まで1m位。

博麗神社はいつも闇古鳥が鳴いている。それが現実！

（博麗神社・境内前）

此処は博麗神社。

結界の要の場所であり、“異変”を解決する巫女が住んでいる。

その名は“博麗 靈夢”と言う少女だ。

この少女、色々と怖い存在でもある。

異変解決の為なら原因らしき存在を倒し、行く手を阻む者や進路に立つた者も倒して進む。

冷血・冷酷と言う訳では無いが、解決する為なら手段を選ばない。もつとも、解決した後は宴会を神社で開く事が最近の日課になっている。

尚、彼女の神社は貧乏である。

自給自足をしていると言つ噂もある。

そんな靈夢は今日も賛銭があるか確認した後、箒で境内前を掃いていた。

「ふう、最近暇ね……。参拝客も来ないし……。」

この前の異変“神靈廟異変”を解決したのだが、これと云つて平穏が続いていた。

「ふう……。ん？」

その時、田の前にスキマが現れた。

ドスンッ！

そんな音が聞こえた。

スキマから何か落ちてきたのだ。

それは人間の男性だつた。

「…………。」「（ピクピクッ！）

顔面から落ちたので、かなり痛いと思う。

靈夢は警戒しながらも少し慌てながら安否を気遣つた。

「だ、大丈夫？」

返事はこいつ返つて來た。

「大丈夫……だ……、問題……無い……。」

グツ！と親指を立てる直人。

「案外タフね。」

直人の隣に上半身をスキマから出していいる紫がツツコむ。

「ちょっと紫。これ何よ？」「

「幻想入り希望者よ。」

「意味が解らないんだけど…。」

「まあまあ、どの道外の世界で能力が覚醒してたみたいだから、一応この世界に連れて來たのよ。」

「…………こいつの能力は？」

「…………あらゆる物・事を増減する程度の能力よ。」

靈夢は直人を見据える。

あの紫が幻想郷に危害を及ぼす存在を連れてきた？

靈夢にとつてそれは考えもしない出来事だ。

「勿論条件付きだけね。」

「条件？」

「まあ、幻想郷の今の角質を何とかして欲しいって言つね。」「無理でしょ？紅魔館の面々は少し認識を改めているけど、野良妖怪はそうもいかないわよ？」

「だからこそよ、私はこの男の“可能性”を見てみたいのよ。」

扇子で口元を隠し微笑む。

「…………あんた、何か悪いものでも食べた？」

「失礼ねえ。ちゃんと藍の料理を食べてきました。」

「じゃあ何でこんな奴を信じるのよ？」

「そうね……、一目ぼれかしら」

「……似合わない。」

「まあそれは冗談として、初対面の私の殺氣を放つた私の素を見たのよ？」

「珍しいわね。あんたが崩されるなんて。」

「自分のした事にちゃんと自覚を持ち、非があるのを理解して謝罪してきたのよ？信じるに値するわよ。」

「ふうん……、それより何時までそいつはその状態なの？』

落下時からその体勢な直人。

まあ理由はだ。

「あ～と……、なんかシリアルスだつたんて立つに立てなくなりまして……。」

「はあ、まあ良いわ。私は博麗 靈夢、この神社の巫女よ。」

そう紹介されたので、直人は立ちあがり紹介を返す。

「直人だ。名字は捨てたので無い。」

「あら？何でよ？」

「まつ、色々あつたんだよ。」

「八雲の名字居る？」「

「謹んでお断りします。」

「あらつまらない。」

そんな会話をしてる内に、時刻は昼頃になつた。  
紫はスキマで家に帰つた。

靈夢は紫に頼まれて直人を住まわす事にした。

「良い？雑用はやつて貰つわよ？」

「解つた。」

「しかし、とんだ暴挙に出たわね……。其処までして幻想郷に來た  
かつたなんて。」

「まあ、あつち少し息苦しいからな。」

「と言づか、女誑しつて何よ。」

「悪いか？」

「襲つてきたら潰すわよ?」

「無理やりとか趣味じゃ無いから」いつから願い下げだよ。

「ふう、食材足りたかしら?」

「無いの?」

「3日分しか無いのよ……。買い物行かなきゃ。」

「ちょっと食料見せて。」

「……一人締めは許さないわよ。」

「しないっての。」

（博麗神社・台所）

外の世界と同じ作りだった。

「何故に?」

「あのね、流石にそいら辺は普及してるわよ。」

「電気とか水道も?」

「ええ、たしか妖怪の山と霧の湖からかしらね。」

「何か凄い名前出てくるな。」

「覚えておいた方が良いわよ。後で教えてあげるから。」

「うい。」

直人は冷蔵庫を開けた。

「少ないな。」

「うるさいわね。家は貧乏なのよ。」

「酒を製造してるので紫さんから聞いたぞ?」

「それはそれ、これはこれ。」

「お約束だな。まあ良いや、とりあえず“増えろ”」

そう言つと、食材が“新品同様”になつて増えていた。

「な！？」

「これが俺の能力だ。使い道は色々あるが、食材を増やすつてのは外でもしてきたからな。」

「ね、ねねねねええええええええええええええええ？」

「落ち着け。」

「お金も増やせるの？」

「出来るぞ、しかも新品。」

「……ちょっと待つてなさい！良い！あんたは今日から博麗 直人と名乗りなさい！はい決定！」

「ちょっと待てえええ！？何故に！？」

「便利！！！」

「ちつたあ本音を隠せ！！！」

「イヤッホーイ これで脱貧(だいひん)おおおおおおーーーー！」

こうして、靈夢は狂喜乱舞をしながら金を取りに行つた。

残つた直人は呟く。

「俺、幻想郷生活が不安になってきた……。」

こうして、幻想郷での生活が始まった。

博麗神社はいつも闇古鳥が鳴いている。それが現実！（後書き）

靈夢のキャラが崩壊してる様な……。  
まあ良いか。

妖怪の恩恵があるから自給自足出来るらしいんだけど、誰かが貧乏  
とか言った所為で貧乏になつたとか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8248y/>

---

孤独な男の幻想入り

2011年11月25日17時50分発行